

大倉雄二

鯨

なまず

元祖〰成り金〰
大倉喜八郎の
混沌たる一生



元祖 成り金
大倉喜八郎の
混沌たる一生

著者略歴

大正8年、東京市本所区小梅町に生れる。母久保井ゆう29歳、父大倉喜八郎82歳。父喜八郎は著者9歳の時、91歳で没。大倉家を継いだ嫡子喜七郎は著者の腹違いの兄になる。慶応大学文学部を繰上卒業して応召、ベトナムから復員。文藝春秋に勤務。昭和53年、定年退職。著書に「逆光家族——父・大倉喜八郎と私」「男爵——元祖プレイボーイ大倉喜七郎の優雅なる一生」(いずれも文藝春秋)がある。

鯨 なまず

元祖“成り金”大倉喜八郎の混沌たる一生

1990年7月30日 第1刷

著者 大倉雄二

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03(265)1211(代)

定価はカバーに表示されています

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷株式会社

製本所 矢嶋製本株式会社

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Yuji Ōkura 1990 Printed in Japan

ISBN4-16-344540-4

總／目次

第一章	丁稚奉公	7
第二章	明治維新	27
第三章	私費洋行	51
第四章	会社設立	77
第五章	西南戰爭	91
第六章	鹿鳴館	109
第七章	官民癒着	127
第八章	日清戦争	141

第九章 台湾進出 157

第十章 日露戦争 179

第十一章 中国借款 193

第十二章 寿像落成 209

第十三章 男児誕生 229

第十四章 感涙会 257

あとがき 281

参考文献 286

装幀・坂田政則

鯨

(なまず)

元祖

〃成り金〃

大倉喜八郎の混沌たる一生

第二章 丁稚奉公

帝劇の舞台ではいま彰義隊本營の場が演じられていて、緊張しきった場面に観客席の一族郎党は静まり返っている。大正十三年のことである。

上野山内、寒松院の庭に乱暴に引き据えられた若き日の大倉喜八郎が殺気だった彰義隊の幹部から、いま厳しい訊問を受けようとしている。彼らの刀や陣羽織が蠟燭の火を映じて、時折、威圧するもののようにざらりと光る。

庭には彼を斬ったあとの血を洗うための水を張った手桶がいくつも並べられている。上手奥の暗いところには大きく砂を盛り、竹箒を立てかけ、すべては刑場のしつらえである。

庭に面した大座敷には金屏風を立てまわし、百目蠟燭の火影に彰義隊頭取天野八郎以下幹部がものものしく居並ぶ。

第一章 丁稚奉公

慶応四年旧暦五月十四日の想定である。

天野の脇に座った幹部の一人が喜八郎に向かい、居丈高に訊ねる。

「砲具商大倉屋はその方か」

「へえ、手前、大倉屋にござります」

「その方が主人か」

「へえ、大倉屋の主人、喜八郎にござります」

「これより天野頭取がお訊ねになる。嘘偽りを申すと貴様の命に係わるぞ」

舞台中央の床几しょうぎに掛けた天野、喜八郎を睨ねめつけておいて口を切る。

「大倉屋に申しおく。われわれは貴様のような奸商をすでに昨夜二人斬って捨てた。貴様と同じ砲具商、島屋新兵衛と車屋七兵衛の手代たちである。貴様はどうしてここに連れて来られたか、思い当たることがあるう。これから訊ねることに一点たりとも偽りがあらば、斬って捨てるから左様心得よ」

「へえ、ありのままお答え申し上げます。ただ、その前にひとつだけお願いがございます。手前の申し上げることを全部お聞きになったうえ、御意に叶いませんときは存分に処分頂きとう存じます」

喜八郎はさすがに青ざめているが、ふてぶてしい。

「いい度胸じゃ、言いたいことは言って死ぬがよい。……では訊ねるが、貴様は公方くほうさまのお膝元で商売していながら、なにゆえあって公方さまのために働くわれわれに不利益を計り、官賊にのみ利益を計りおるのか。貴様は謀叛人じゃ」

「頭取さまは官賊と仰せられますが、官軍では幕賊と仰います。田舎出の小商人の手前には謀叛人と仰せられても訳が分かりません。また、公方さまのお膝元と仰いますが、田舎からやってくるいづれも経っておりませんので、公方さまのご恩義も手前には分かり兼ねます」

と、出身地、越後新発田しばた訛りでのろのろと抗議をする。

「黙れ！ 動かぬ証掟があがっておるのを知らんのか」

いきり立った天野の一喝に、警護の隊士らは刀の柄に手をかける。

「証掟が上がっていると仰せられますが、いかなる証掟でございますか。手前、お聞きになることは何にでも真っ直ぐにお答えいたします」

「貴様は店に鉄砲があるにかかわらず、われわれが行くと言つて断り、官賊が行くと尻尾を振つて商売しているのは不埒ふちち極まる所業である」

あのことかと連行された理由がはつきり分かつた彼は、腹に力を入れて答える。

「それには仔細がございます。昨日、こちらさまのお使いが鉄砲を買いにおいでくださいましたとき、『ありませぬ』と、手前、たしかにお断り申し上げました」

隊員がざわめく。副頭取格の一人が天野の耳元で囁くと、頷いた天野の目の合図で一人の兵士が喜八郎のうしろに回り刀を抜く。

「頭取さまはあるではないかと仰せられましたが、大倉屋には見本のほかに一挺たりとも鉄砲や大砲おおづつの持ち合わせはございません」

彼はこう言つておいて、自分のような小商人は注文のあり次第、横浜の外国商館へ駆けつけ現

金で仕入れている。したがって鉄砲を買うのに大金を持って横浜に行かなければならない。途中は昼間でも追剥^{おひぎ}が出るし、人殺しもあって非常に危険だが、危険を冒さなければお武家さまにお納め出来ないと説明し、「先日などは生首が転がっておりました」と、言わなくてもよいことを言って隊員の反応を確かめる。

「御用向きによりましては夜中でも駕籠を飛ばさねばなりません。万一に備え手前はいつも駕籠の座布団の下にピストルを二挺隠し持っております。曲者^{くまもの}が出たときには一挺は手前が使い、あとの一挺は駕籠屋の親方に渡して計十二発の弾を撃ち、手前どもの身を護るためでございます。口はばったいことを申し上げるようですが、お武家さまがたが命がけで戦いにお出かけになるのと同じ気持で手前もこの御時世、大倉屋は命をかけて商いをいたしております」

彼らが黙って耳を傾けるのを身体で感じると、彼は声を励ましてさらに続ける。

「手前、大倉屋は商人^{あきんど}にござります。官軍の旦那さまがたはいつも現金でお支払いくださいますから次の仕入れができますが、これまで彰義隊さまにはたびたび鉄砲をお納めいたしましたが代価を一文もお払いくださりませぬ。それでは次の仕入れをいたし兼ねますのでお断りしたまででございます」

静まり返った舞台の喜八郎は一息つく^{かたち}と容を改め、きつとなって彼らを睨みつける。

「重ねて申し上げます。手前、大倉屋は商人にござります。商人の手前にとりましては商売が命、お金を支払ってくださる方だけがお客さまでございます」

ここで、「待ってました」「大倉屋あ」の掛け声とともに客席から一斉に嘆声もれる。感激の

あまりハンカチを目に当てる婦人たちもいる。

これが後年大倉財閥の創始者となる大倉喜八郎の生涯を通じての見せ場である。その彼が数え八十八歳の米寿と結婚五十周年を目出度く迎えた今年、やがて、世の人を驚かしたり憤慨させることになる華々しくも傍若無人な祝賀行事のかずかずの皮切りが、今日の帝劇の舞台であった。

今回、喜八郎が米寿を区切りとして、帝国劇場の二代目会長の椅子を後任の福沢桃介に譲るにあたって、帝劇の役員たちは、

「会長の胸像を作らせて、派手な除幕式を舞台でやろう。ついではそのあとのことだが、金持に記念品を贈ったって仕方がない。じいさん日ごろ自慢にしている例の見せ場を芝居にして、われわれがじいさんを招待したらどうだろう」

と演劇人らしい洒落た企画をたて、早速、座付作者、松井松翁に依頼して台本を書いてもらうことにした。

へいじいさんこと大倉喜八郎翁、喜ぶまいことか三日にあげず拙老宅に電話がかかってくる、自分が頼んだでもないのに台本に注文をつける。あの場面もいれろ、この場面も是非と言われるから、「上演時間の関係がありますからそんなには入りません」と答えると、「上演時間なんかいくら延びたって構わない」と、招待されているのに主催者側のような返事であった。

いよいよ上演の日が来て上機嫌の翁は幕間の廊下で拙老や愚妻とすれ違ふたびに、こちらが恐縮してしまうほど丁寧な挨拶をされる。この大きな赤ん坊は舞台の上で自分の得意とする場面が

演じられているのが、嬉しくて仕方がないように見えた」

とは松翁の喜八郎追悼記の一節である。

この舞台は二日にわたり、一族と彼が関係する会社の社員やその家族に限り見せている。外題は『明治の曙』、帝劇大部屋俳優総出演の愛国劇だった。台本は残念ながら残されていない。喜八郎は舞台で挨拶したあと、ローヤルボックスで若き日の自分の姿に大感激していたという。

いま自分の一世一代の晴れ姿を舞台に見てへらへら喜んでいる喜八郎は、松翁が言うような「大きな赤ん坊」とはまるで反対の評価を世間から受けていた。評価とは、日本黎明期の動乱のなかでなければ現れえなかった怪物、「死の商人」がそれである。上野の戦争以前に官軍方、幕府方いずれを問わず鉄砲を売ったのを皮切りに、中国革命のときにもどちらにも兵器を売りつける。どちらにも金を貸しつける。

乱世に生きる商人にとって、敵対している双方に関係を持つことは一種の保険と考えられないこともないが、「死の商人」と言われても仕方がない。無節操極まりない商法が通用した幕末、喜八郎はこれで巨万の富を蓄える。もちろん命と引き換えの冒險商法であった。

のちに日本が近代化の道を歩み始め、これが通用しなくなると、動乱の中国で同様なことを始める。政治家と密着した彼は資産をますます殖やし続け、多方面に拡がった彼の事業は特異な形ながら財閥の形を取りつつ発展した。

こういう喜八郎は、わずかの金を握りしめて江戸に出て苦節十年、戦乱の幕末に鉄砲屋を開業すると稼ぎに稼いで産をなし、商人としては日本初の洋行をし、欧州で岩倉使節団の高官の知遇

を得、帰ると大倉組を創立して、貿易、建設業を興すかたわら軍の御用達、つまりエージェントを始める。当然、政府密着の商法をとり、西南の役、日清、日露の戦役でまたまた政商として大きく身代を築く。これと前後して朝鮮、中国へも積極的に進出し、大倉洋行(組)の名を轟かせた豪の者である。

彼が創立した大倉財閥は昭和に入って子息喜七郎に引き継がれ、敗戦とともに解体される。現在、喜八郎が創立した会社としては大成建設、大倉商事、日本無線などが健在である。

このあと、十月の末には米寿の宴の本番が四日間にあつてやはり帝劇で開かれ、中国からわざわざ呼び寄せた梅蘭芳^{イラフアン}はか一流の俳優たちが演じる京劇を、一日五百人ずつ二千人の招待客に見せている。そのあと、盛大にして豪華極まりない晩餐会を催して、当時の最上層の日本人でもめったに口にするのできなかった、洗練された西欧の味覚と年代もののワインをふんだんに振る舞った。

招待客は皇族はじめ総理大臣加藤高明以下各閣僚、軍閥の巨魁と新聞がはやしている田中義一、山梨半造やこの日のためにはるばる中国から訪れた多くの中国軍閥の要人などで、今までの日本では考えられなかった種類の祝宴である。

あくどく金を集め、ふだんは吝嗇に近い彼だが、散じるときはあくどいまでの大げさにして大胆な演出があつた。

今にして思えば、三井、岩崎、住友を向こうに回して中国大陸で大倉の名を広めるための大デモンストレーションだったのだ。

震災後の焼け跡の東京で、日清日露の戦いのころから奸商・悪徳商人とまで罵られている喜八郎の大宴会のプランが漏れると、各紙は連日これを大きく取り上げる。震災後の恐慌が近づきつつあったそのころ、前代未聞のお祭り騒ぎとも、未曾有の浪費とも書かれた新聞の見出しは、罹災した民衆の気持をまさに逆撫でするものであった。民衆の怒りはやがて社会問題にまで発展する。明治の初期、資本主義の黎明期にはこうしたあくのつよい成功者は輩出するが、その多くは挫折、脱落してゆき、政府の強力な援助を得た新興の岩崎が頭角を現し、渋沢、安田、大倉がこれを追った。

この間、両替商出身の老舗、三井、住友、鴻池は悠々我が道を歩んだかに見えるが、これとて維新の混乱期に非常な危険を体験しているのだ。また同じ両替商出身で政府高官、とくに井上馨に重宝された老舗の小野組、島田組は明治十年ごろには早くも脱落している。こういう歴史の流れから見れば、喜八郎は一代で産を成した数少ない成功者の一人である。

その成功者が、いま帝劇の舞台で演じられている自分の一世一代の見せ場に、満場の招待客がお世辞にせよ大きな嘆声を洩らすのを聞くと、彼の幸福は絶頂だったに違いない。そのうえ、彼は十年前にはすでに男爵の称号を与えられ、華族に列しているのである。

今日、大きな赤ん坊になった彼は、自分のハイライトにわけもなく感激し、自分の富と栄誉を招待客に無邪気に見せびらかしている。

喜八郎の没後、十年以上経って、藤森成吉の台本で前進座の中村翫右衛門が彼に扮し、『上野の戦争』の外題で彰義隊に喚問される喜八郎の場が演じられた。